

神経芽細胞腫マススクリーニングで発見された357例。

— 1988年度までの集計結果から —

(分担研究：現行マス・スクリーニングの問題点に関する研究)

沢田 淳¹⁾、武田武夫、山本圭子、塙 嘉之、角田昭夫ほか、
日本小児がん研究会神経芽腫委員会委員。

要約：1985年から神経芽細胞腫のスクリーニングが全国的に実施され、1988年には、VMAのみの定性検査からHPLC（高速液体クロマトグラフィー）を使ったVMA、HVA、クレアチニンの定量によるスクリーニングの実施が推奨され発見例が増加した。1988年度末までに発見・診断された例は357例に達したので臨床的分析を行った。1987年までの発見頻度は1/15,000であったが、1988年には1/8,429となり、発見率がHPLCの導入によって増加した。対象者の78.9%が検査を受けた。これら357例の生存率は97%と高かった。今後、受検率の向上とフォローアップの充実のための工夫が必要である。

見出し語：神経芽細胞腫、スクリーニング、発見例、分析。

研究方法：1988年度までに日本小児がん研究会神経芽腫委員会に集計された神経芽細胞腫357例を全国の神経芽腫委員（下段）により集計された登録調査票により分析した。

結果：

1. 年度別頻度・受検率（表1）：1985年の全国実施までは各地区で個別に行われていたが、1985年には出生数をもとにした受検率を示した。1985年、58.6%（834,536/

1,425,043）であったが、その後、漸増して1988年以降には78.9%を越えた。さらに増加するように努力が必要である。頻度もHPLCの使用によって1/8,429・乳児となった。

2. 1988年度末集計：1988年度までに357例のレポートが集計できたので、臨床的分析を示す。症状ありが5例（1.5%）で、この内2例には神経芽細胞腫によると思われる呼吸困難、眼瞼腫脹があった。なしは343例（96%）。

¹⁾ 京都府立医科大学小児科（Dept. of Pediatrics, Kyoto Prefectural Univ. of Medicine）

記録なし 9 例 (2.5%), 原発部位は腹部が 311 例で, 197 副腎, 104 後腹膜部, 10 骨盤内であったが, これらのうち診察で腹部腫瘍を触れたのは 158 例 (51%) に過ぎなかった。縦隔は 45 例 (13%) であった。原発部位は組織像と同様にスクリーニング発見例に特徴はなかった。病期は予後良好な I, II, Ns 期が 268 例 (75%) を占めたが, 進行した N 期が 28 例 (8%) にみられた。生存例は 348 例 (97%), 死亡 7 例 (腫瘍死 3 例, 術中死その他 4 例), 追跡不能 2 例であった。

考察: 1974 年スクリーニング開始以来 1988 年末までの受検数・率, 神経芽細胞腫発見例・

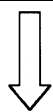
頻度の推移を示した。今後, HPLC によるスクリーニング数の増加によりさらに多くの例が発見されると予測されるが, 現在, 受検率が 78.9% で, 今後, その向上のための施策が必要と思われた。さらに集計できた 357 例は行政で集計された例の 90% 以上と推定されるが, 100% 集計への努力が必要である。

文献

1. 沢田 淳: 日本小児がん研究会・神経芽腫委員会報告: 神経芽腫マススクリーニングの全国集計結果。第 6 回日本小児がん研究会。平成 2 年 11 月 30 日。東京都。

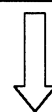
表 1. 神経芽腫スクリーニング受診者・年度別発生数および頻度

	対象者数 (出生数)	受診者数	受診率	NB 例	頻 度
1984	1,469,923	124,870	8.5%	3	1/41,600
1985	1,425,043	834,536	58.6%	56	1/14,902
1986	1,374,666	997,643	72.6%	66	1/15,116
1987	1,332,491	1,024,841	76.9%	88	1/11,645
1988	1,314,006	1,036,740	78.9%	123	1/8,429
1989	1,246,802	1,033,535	82.9%	126	1/8,203
		5,052,165		468	1/10,795



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:1985 年から神経芽細胞腫のスクリーニングが全国的に実施され,1988 年には,VMA のみの定性検査から HPLC(高速液体クロマトグラフィー)を使った VMA,HVA,クレアチニンの定量によるスクリーニングの実施が推奨され発見例が増加した。1988 年度末までに発見・診断された例は 357 例に達したので臨床的分析を行った。1987 年までの発見頻度は 1/15,000 であったが,1988 年には 1/8,429 となり,発見率が HPLC の導入によって増加した。対象者の 78.9%が検査を受けた。これら 357 例の生存率は 97%と高かった。今後,受検率の向上とフォローアップの充実のための工夫が必要である。